能『八島』考――「生死の海」と「真如の月」

鈴木　さやか

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第22巻第１号（2023年９月）抜刷

【研究ノート】

能『八島』考――「生死の海」と「真如の月」

鈴木　さやか

はじめに

能『八島』は世阿弥作とされる修羅能の一つで、『平家物語』中の八島（屋島）の合戦を中心に、源平の争いを描いたものである。永享四年（一四三〇）の奥書を持つ『申楽談儀』[1]には、「道盛・忠度・よし常、三番、修羅がかりにはよき能也」との言葉もあり、世阿弥が『八島』を修羅能の成功例だと捉えていたことが伺える。

では、『八島』はいかなる点が「修羅がかり」すなわち修羅を描いた能として「よき能」であると考えられていたのだろうか。世阿弥自身が『申楽談儀』内で「よき能」の判断基準を示していない以上、何をもって『八島』を「よし」としていたのか、断言することはできない。しかし、右に引いた文が「直ぐなる能」について語る文脈の中に置かれていたことは、何ほどかの示唆を与えてくれるように思われる。

先、祝言の、かゝり直成道より書き習ふべし。直成体は弓八幡也。曲もなく、真直成能也。当御代の初めのために書きたる能なれば、秘事もなし。放生会の能、魚放つ所曲なれば、私有。相生も、なをし鰭が有也。祝言の外には、井筒・道盛など、直成能也。（中略）道盛・忠度・よし常、三番、修羅がかりにはよき能也。此うち、忠度上花歟。

世阿弥は、能を作曲する際には、祝言（祝意を表す曲）の能で、かつ「直ぐなる」能から書き始めるべきであるという。そして、「直ぐなる能」を説明するに、祝言以外の能では、『井筒』・『道盛』が「直ぐなる能」であり、『井筒』もまた（世阿弥が定めた曲の最高位である）上花である、と述べている。それに続けて、「道盛・忠度・よし常」が「よき能」である、というからには、「よし常」すなわち『八島』も、『道盛』と同じ「直ぐ」性を何ほどか備えていると判断することができるだろう。

主題の提示

世阿弥能楽論において、「直ぐさ」とは、たとえば「序の本風の直ぐに正しき体」（『花鏡』）[2] などと説明されている。「序の本風」とは、あらゆるもの・ことの成立にかかわる根源の働きであり、それを「直ぐに正し」く表す体とは、根源の働きがそのまま現出したような能を意味しよう。そのことを裏付けるかのように、修羅能でありながら「直成能」とされた『道盛』では、手向けられた法華経の功徳により、シテの道盛とツレの小宰相の夫婦だけでなく、平家一門、ひいては敵の木村源五重章までもが救われていくという筋書きを持つ。

では、『八島』の「直ぐ」性はいかなるところに現れているといえるだろうか。稿者は曲全体に光を投げかけている「真如の月」の存在に、「直ぐ」性が現れていると見たい。

本曲において、「海」と「空（そして空にかかる月）」とは、常に対照的なものとしてくり返し語られる。その対照性がもっともよく表れている言葉は、「生死の海」と「真如の月」である。

戦いにあけくれる「弓取」たちは「生死の海」に沈淪するが、それらの営みを、「空」に澄み渡る「真如の月」が絶えず照らしている。だが、その「海」と「空」は、終曲にあって、「水や空、空行くもまた雲の波の」と、その区別をなくし、一体化していく。そして『八島』において、「海」と「空」とが一体化していくありようは、一人の武将である義経自身の変容と内的に呼応しているのである。

この、「空に水を見、水に空を見る」ありようは、『八島』一曲の理解にどのようにかかわってくるのであろうか。結論を先取りするならば、それは地上の迷いの世界たる「生死の海」と「真如の月」が象徴する遥かな西方浄土とをひとつところに見ようとする、世阿弥の願いが隠されていると考えられよう。そのことを、『八島』の詞章を検討しながら跡付けていきたい[3]。

第一章（序）では、前シテとして現れる漁翁が、大きな視点で八島での合戦の様子を語り出すことによって、敵（海の平家）・

味方（陸の源氏）のすべてが「雲居＝都」に帰れぬ悲哀をたたえていることを確認する。

第二章（破）では、「よし常」の「名乗り」を契機として後シテの語りが義経自身に集約化・内面化されていき、そのことがかえって「生死の海」の中で「名を惜しむ」すべての「弓取」の本質を克明に描き出すことにつながっていることを述べる。

そして、第三章（急）では、引歌として用いられる『新後拾遺和歌集』所載の「水や空」の和歌に着目する。そのうえで、「真如の月」の光を地上の迷いの世界たる「生死の海」全体に投げかけ、包み込もうとする世阿弥自身の願いを明らかにしていきたい。

考察に先立ち、『八島』のあらすじを述べる。

季節は春。西国行脚を志した都の僧一行は、讃岐の国に入り、源平の古戦場である八島の浦に辿り着く。日暮れ時、塩屋に宿を求めようとする旅僧たちの前に、塩屋の主という漁翁と漁夫が現れる。漁翁は、一夜の宿を請う旅僧の求めを一度は断るものの、旅僧が都の者だと知ると宿を貸すことを肯んじ、都への懐かしさに涙を流す。旅僧の求めに応じ、漁翁は屋島の源平合戦について、錣引き（しころびき）の戦いや継信・菊王の死などをまるで見てきたかのように詳しく語り出す。不思議に思った旅僧が名を尋ねると、漁翁は暁の修羅の時に名乗ろうと、自分が義経であることをほのめかし消えていく。

所の者である塩屋の主から那須野与一の扇の的の話を聴き、先ほどの漁翁が義経の霊であろうと聞かされた旅僧は、夜半、塩屋にて読経しつつ亡霊の出現を待つ。やがて甲冑を帯した義経の亡霊が現れ、妄執の瞋恚に引かれて合戦の場に立ち戻ってきてしまう苦しみを訴える。義経の亡霊は、屋島の合戦で波に流された弓を敵に取られまいと、命を惜しまず取り返した「弓流し」の一件を語る。さらに、修羅道での教経との激しい戦いを見せるうち、夜が明けて、敵の様子は鷗に、鬨の声は浦風と化して、僧の夢は覚めるのであった。

第一章　海と陸――この世の闘諍

空と海の対置

曲冒頭において、都から西国行脚に赴く僧たちの想いは次のように語り出される。

「月も南の海原や、月も南の海原や、八島の浦を尋ねん。

空をめぐる月と、広大な海原がまず僧たちの眼によって捉えられることに注意したい。この、「空」「月」と「海」の一対は、続く〈上歌〉でも以下のように強調される。

「春霞、浮き立つ波の沖つ舟、浮き立つ波の沖つ舟、入日の雲も影添ひて、そなたの空と行くほどに、はるばるなりし舟路経て、八島の浦に着きにけり、八島の浦に着きにけり。

目的地である八島を目指す僧たちの眼に映る景色は、「浮き立つ」という言葉を軸に対置される「霞」と「波」であり、「海に」入る「日」である。同じく船旅であるワキの道行が、経過する地名を入れつつ語られる『高砂』『江口』などと比較すると、『八島』がいかに空と海の対置に意を用いているかがわかる。

老人の登場

この「空と海の対置」は、シテである老人の登場においても明確に示される。

「面白や月海上に浮んでは波濤夜火に似たり。

海上では月が煌々と輝き、その月の光の力で、海に漁火がともったようになっていると漁翁はいう。漁翁が、その景色を「面白や」と嘆じていることにも注意したい。月の光の力が海に及んでいる景色を目の当たりにしたシテが「面白や」と語るところに、終曲の「空と海との一体化」が予感されている。

同じことが、続く

「漁翁夜西巌に傍うて宿す　暁湘水を汲んで楚竹を焼くも、今に知られて

にも言える。右の詞章は『古文真宝前集』の

漁翁夜西巌に傍うて宿る　暁に清湘を汲んで楚竹を燃く　煙消え日出でて人を見ず。欸乃一聲山水緑なり。天際を回看して中流を下れば、巌上無心に雲相逐ふ。

に拠ったものである[4]。「漁翁の動作・行為が刻々と移り行く清新な朝の自然の動きと一つになって描かれて」いると評される柳子厚の詩であり、結句の「無心の雲」は「虚無、無為、自然の道の象徴である」ともいわれる。『八島』のシテがそうした「漁翁」の境地を「今に知られ」るとしていることも、修羅の闘諍を超えた清澄な境地を何ほどか感じさせよう。

だがそもそも、なぜシテである義経は、漁翁の姿で現れたのか。

シテが里人の姿をとって現れ、僧等のワキと言葉を交わすのは能の定型であり、八島という舞台にあっては漁師に姿をやつすのがもっとも自然な流れである、という見方もできるだろう。しかし、海と陸との争いを描く『八島』にあって、前シテを「海人」と定めたことの意味をいま少し考えてみたい。

漁翁が語る「一葉万里の舟の道、ただ一帆の風に任す」は、『平家物語』十巻「惟盛入水」の「一葉の舟に棹さして、万里の蒼海にうかび給ふ」から取られた表現である。波間に浮ぶ「一葉」の定めなさは、『清経』『敦盛』においても、

保元の春の花、寿永の秋の紅葉とて、ちりぢりになり浮ぶ、一葉の舟なれや（『清経』）

寿永の秋の葉の、四方の嵐に誘はれ、散り散りになる一葉の、舟に浮き波に臥して、夢にだにも帰らず（『敦盛』）

と語られていた。これらは、言うまでもなく、源氏に追われ海を漂う平家一門の寄る辺のない境遇を示すものである。前シテの視線、想いはひとり義経自身を対象としているわけではなく、屋島にて戦ったすべての武将たちの運命に注がれているといえよう。

望郷の念と涙

一夜の宿を請う旅僧たちの願いを一度は断った漁翁だが、一行が都から来た者たちで聞くと「げにいたはしき御事かな。さらばお宿を貸し申さん」と態度を一変させる。

そして、漁翁はツレの漁夫とともに、「照りもせず曇りも果てぬ春の朧月夜」に敷物とてない塩屋に旅僧たちを泊まらせるいたわしさを嘆いた後、

「さて慰みは浦の名のさて慰みは浦の名の、群れゐる鶴を御覧ぜよ、などか雲居に帰らざらん、旅人の古里も、都と聞けばなつかしや、われらももとはとて、やがて涙にむせびけり、やがて涙にむせびけり。

と涙を流す。ここに至って、漁翁が旅僧に示した同情心は、漁翁がかつて都人であったことに起因することが明かされる。ここで引かれている和歌、

天つ風吹けひの浦にゐる鶴のなどか雲居に帰らざるべき（『新古今和歌集』・雑下）

は、『和漢朗詠集』『忠見集』『清正集』にも見え、大空に飛び帰る鶴に、再び昇殿を許されたいという作者の望みを重ねて詠まれたものであるという[5]。右の歌を引くことで、シテ義経の「都に帰りたい」という切実な望郷の念と、それがかなわない悲しみとが伝わる。

そして、「都に帰りたい」という願いは、平家一門の切なる願いでもあった。「われらももとは」と涙にむせぶありようは、敵味方を越え、望郷の念を抱えながら都を離れた地で命を落とさざるを得なかったすべての人々の姿である。そしてその涙は、弓取たちの死を悼む周囲の者たちの供養の涙でもあろう。

八島語り―海と陸との対置

やがて旅僧の求めに応じて、漁翁は「屋島の合戦」について語り始める。『八島』の戦語りの本説（出典）は『平家物語』巻十一の「嗣信最期」「那須与一」「弓流」である。その中で「名乗り・言葉戦い・鏑引き・嗣信と菊王の戦死（以上前場）・扇の

的（アイ）・弓流し・教経と義経の戦い（以上後場）」が選び取られて語られている。

ともあれ、前シテの語りで特に注目すべきは、「海」の平家と「陸」の源氏との対置の強調である。両軍の言葉戦いが終わり、いよいよ実戦が始まるというとき、

兵船一艘漕ぎ寄せて、波打際に下り立つて、陸の敵を待ちかけしに、

と語る詞章にもその意識は表れている。また、続く鐙引きにもその「海・陸」の対置の意識は明らかである。本説である『平家物語』の鐙引きにおいては、景清に鐙をつかまれた三保の谷十郎（『八島』では三保の谷四郎）が「鉢付の板よりふつとひつきッてぞにげたりける」と語り収めている。それに対し、『八島』では、

「互いにえいやと、「引く力に、「鉢付の板より引きちぎつて、左右へくわつとぞ退きにける

と、源平双方を主体として描く。続く「嗣信と菊王の戦死」も、

「ともにあはれとおぼしけるが、舟は沖へ陸は陣へ、相退に引く汐の、跡は鬨の声絶えて、磯の波松風ばかりの、音さびしくぞなりにける

とある。つまり、平家と源氏、海と陸とを舞台の左右に置いて、その双方を平等に描くことを徹底しているのだ。この前シテの語りには、当時の芸能の一種である「屋島語り」が取り入れられているという説があり、この「海・陸」の対置もその「屋島語り」を踏襲したものであるかもしれない。ともあれ、武者の執心のありかに焦点があてられていく『実盛』『忠度』などの修羅能と異なり、『八島』の前シテが平家と源氏の「あはれ」のどちらをも語ろうとしていることは注意してよい。

「よし常の憂き世」――規模の言葉

合戦の様子をあまりに詳しく語る漁翁を不審に思い、旅僧は名を名乗ることを求める。それに続くのが、「名乗り」について

の漁翁と旅僧との問答である。漁翁は『新古今和歌集』の和歌を引きつつ一度は旅僧の依頼をはぐらかすが、ふたたびの旅僧の願いにこたえる形で、

「春の夜の、「潮の落つる暁ならば、修羅の時になるべしその時は、わが名や名のらん、たとひ名のらずとも名のるとも、よし常の憂き世の、夢ばし覚まし給ふなよ、夢ばし覚まし給ふなよ。

と告げて姿を消す。

『申楽談儀』では、「規模」の言葉を効果的に用いることの重要性を説くなかで、『八島』の右の詞章を例にとった次のような件りがある。

ことの序に、其能の規模の言葉を、ちやと書けば、人も聞きとがめず、悪き也。屋島の能にも、「よし、常のうき世の」といふ言葉は規模なれば、「其名をば語り玉へや、わが名何と」と先聞かせて、扨「よし、常の」と書けば、誰が耳にも入りて、当座面白き也。

「規模」とは、「眼目、肝心、要、中核、規矩、規範」の意であるという[6]。世阿弥は、一曲の眼目となる言葉は、「ちやと」、無思慮に書くと人の耳に入らず、そのようなやり方は下策であると述べている。それに対し、『屋島』の能については「よし、常のうき世の」という言葉が一曲の眼目であるため、まず「どうかお名のりください」「我が名を何と名乗ろうか」と名乗りに関する問答を入れるのだという。すなわち、この問答によって観客の「漁翁の真の名」についての意識を高めたうえで、「よし、常（義経）の」という詞章を入れることで、観客は目の覚めるような面白さを味わえるのだと世阿弥は説く。

ここでの「規模」とは、一曲の主役を明らかにするという意味でのみ、「眼目」だとされているのではあるまい。本曲の眼目は「よし、常のうき世の」全体が表していると考えるべきであろう。

通常、「憂き世」は「常無き世」、すなわち「無常」の世であるとされる。その中にあって、「生き死にを繰り返すこのつらい世こそが〈常〉なのだ」とする言葉は、無常の世をそのままに受け止め「よし」と追認する、醒めた目を感じさせる。

そして、右の問答と名乗りを通じて名を顕わにすることで、一曲のシテは八島の戦い全体を概観する漁翁から、「弓取」を業

を集約化・内面化して語り出す「義経」へと変容していく。そして、冴え返る「真如の月」の光を契機として、「生死の海」を漂いながら「名を惜しむ」弓取たちの姿が、より顕わになってくるのである。

第二章　生死の海と真如の月

問答と澄みゆく空

前シテが姿を消した後、旅僧は塩屋の主（アイ）から那須の与一の扇の的にまつわる話を聴き、供養を勧められる。読経をしつつ待つ旅僧のもとに、武将姿の義経の亡霊が現れる。

「落花枝に帰らず、破鏡再び照らさず。しかれどもなほ妄執の瞋恚とて、鬼神魂魄の境涯に帰り、われとこの身を苦しめて、修羅の巷に寄り来る波の、浅からざりし業因かな。

後シテの登場とともに謡われる「落花枝に帰らず、破鏡再び照らさず」は、元は『景徳伝燈録』（中国北宋代の禅宗の史書）にある言葉だと言われる。ちなみに、この成句について『正法眼蔵』「大悟」では次のように引かれる[7]。

京兆華厳寺宝智大師、洞山に嗣ぐ、諱は休静、因みに僧問う、大悟底の人、却って迷う時如何。師曰く、破鏡は重ねて照らさず、落華は樹に上り難し。

（京兆華厳寺の宝智大師は、洞山の法嗣であるが、ある時、一人の僧が師に問うていった。

「大悟底の人が、ふたたび迷った時には、どうなるでありましょうか」

師はいった。

「破鏡は重ねて照さず。落花は枝にのぼりがたいじゃ」）

『八島』において、「落花枝に帰らず、破鏡再び照らさず」という詞章は「一度死んだ者はふたたびこの世には帰らない」たとえと解釈されることが多い。だが、典拠となる僧と宝智大師の問答によれば、「落華」「破鏡」はその時その時の悟りを指すもの

であろう。同書においては、先の引用箇所に続けて、次のように語られている。

不迷なるを大悟とするにあらず。大悟の種草のためにはじめて迷者とならんと擬すべきにもあらず。大悟人さらに大悟す。大迷人さらに大悟す。

（さらにいえば、迷わないことを大悟とするのでもなく、大悟の肥しにするために、まずはじめは迷うのがよいとするのでもない。大いに悟った人もさらに大悟するのであり、大いに迷った人もまた大悟するのである。）

師云ク、「破鏡不重照、落華難上樹」。この示衆は、破鏡の正常恁麼時を道取するなり。

（すると、師は、「破鏡はかさねて照さず。落花は枝にのぼりがたし」といった。この垂示は、鏡の破れるまさにその時をいったのである。）

ともあり、この表現はもとは悟りの瞬間を指す言葉であることがわかる。もちろん、成句が日常において使用されていくうちに意味が変質していくことはままあるが、ここでは「なほ妄執の瞋恚とて」と併せ考え、義経の死後の状況を表している語であると見たい。すなわち、義経は「憂き世こそ常である」と現実をありのままに受けとめ、受け入れる点において、何ほどか「大悟」の境地にある。しかし、生前の闘諍において抱いた怒りや恨みの心がわだかまりとなり、この迷妄の世に留まって、われと我が身を苦しめているのだということがわかる。

そして、義経が捉われ、陥っている世界は、「海」によって表されている。先にも引いた義経の言葉にも、「修羅の巷に寄り来る波の、浅からざりし業因かな」とあるように、修羅の境地に踏み入れることや業の深さは「波」という言葉で表されている。さらに、生々流転を波のように繰り返す生者の在り方は、「生死の海」という表現で言表される。

われ義経が幽霊なるが、瞋恚に引かるる妄執にて、なほ西海の波に漂ひ、生死の海に沈淪せり。

ここで、平家の陣営を表す場であった「海」は、迷いの世界にある義経自身の居場所であると捉え直される。そして、生々流転の迷いの海に沈んでいるという義経に、旅僧は次のように応え、義経の変容を引き出していく。

おろかやな心からこそ生死の、海とも見ゆれ真如の月の、
春の夜なれど曇なき、心も澄める今宵の空

僧は、生死の海に沈んでいるという義経の発言を「おろかやな」と断じる。「生死の海に沈む」と見るのは「心から」、すなわち己れの見方に捉われたありようである。しかし、仏に委ねる心をもって見れば、いついかなる時も、「真如の月」はわれわれの世界を照らしている、というのである。

旅僧の言葉に促されるように、義経は空を見上げる。曲前半において「春霞浮き立つ」（p129）、「霞の小舟」（p130）「霞に浮ぶ松原」（p131）「霞わたりて沖行くや」（同）「照りもせず曇りも果てぬ春の夜の、朧月夜」（p133）とあった。しかし注目すべきは、僧の言葉を契機として、「春の夜なれど曇りなき、心も澄める今宵の空」と、霞が晴れ真如の月の光が煌々と照り輝き出したことである。そして、その月の光に洗われるようにして、義経の心も「澄んで」ゆくのである。

『八島』は、「世阿弥が多数制作している修羅能のなかでは、シテはとくに成仏を希求していない」点が特異であると指摘される[8]。確かに、義経は「わが跡弔ひて賜び給へ」（『忠度』）「弔ひて賜び給へ、跡とぶらひて賜び給へ」（『実盛』）のように、わかりやすく僧の供養を希求することはない。しかし、前シテの漁翁が「よし常の憂き世の、夢ばし覚まし給ふなよ」と旅僧に呼び掛けたのは、旅僧の読誦に守られながら「夢物語申す」ことを期しているのではないか。そのことは、アイ狂言において、旅僧が「ありがたき御経を読誦し、重ねて奇特を見うずるにて候」と語り、また曲後半において「重ねて夢を待ちゐたり」と語っていることからも伺えよう。なればこそ、塩屋の主も、「人の塩屋をわが存ぜず、わが塩屋を人に知らせぬ大法（重いおきて）」を破り、僧の逗留のために塩屋を貸すことを決意するのである。義経の霊の供養は、供養される義経、供養する旅僧、そして八島の住人すべての希求するところであるといえよう。

弓流し

旅僧の見守る中、義経は「昔を今に思ひ出づる、舟と陸との合戦の道」と、再びこの地での合戦の様子を克明に思い出していく。前シテの語りが舞台を大きく捉え、海の平家と陸の源氏を一つの構図に収めるような語り方をしていたのに比べ、後シテの

語りは義経自身の執心に焦点が絞られていく。

義経は、「弓箭の道は迷はぬに、迷ひけるぞや生死の、海山を離れやらで、とにかくに執心の、残りの海の深き夜に、夢物語申すなり、夢物語申すなり」と言って、自身の「弓流し」の昔語りを始める。

「夢物語」を始めるにあたり、義経が

思ひぞ出づる昔の春、月も今宵に冴えかへり、

と、冴え冴えとあたりを照らす月に言及している点が注目される。原典となる『平家物語』巻第十一「弓流」では、義経が海上の弓を拾おうとした際に月が出ていたという描写は見られない。しかしだからこそ、『八島』の「思ひや出づる昔の春、月も今宵に冴えかへり」の記述の意味は大きい。「夢物語」の中で思い出される個々の振舞い・感情は、決して生前の事実と同じではない。むしろ、旅僧の供養のもと、生前の振舞い・感情がどのようにとらえ直され、語られ直されていくかが問題なのである。真如の月に照らされる中、義経は弓を拾ったときの自身の振舞いの意味を明らかにしていくのだ。

『八島』の「弓流し」の場面において際立つのは、義経の「名を惜しむ」姿勢である。そのことは、「名」という言葉が一切用いられない、『平家物語』の「弓流」と比較すれば明らかである[9]。

『八島』では、義経の行為を批判する相手を、義経の正妻の乳母である十郎権頭兼房であると定めている。兼房は『義経記』にのみ登場する架空の人物で、義経の最期を見届けた後凄絶な死を迎える忠臣として知られる。その兼房が「たとひ千金を延べたる御弓なりとも、御命には替へ給ふべきかと、涙を流し申」し上げる姿は、義経がいかに家臣たちに慕われ、かけがえのない主として頼みにされていたかを観客に強く感じさせる。そして、この兼房の「弓（物）よりも命を惜しめ」という言葉にあらがうように、義経の「名を惜しむ」覚悟が語られるのである。

「義経源平に、弓矢を取つて私なし、しかれども、佳名はいまだ半ばならず、

「弓取」が「名を惜しむ」時、それは単なる個人の功名心や名誉欲といったものにとどまらず、「兵としての己れのあるべき姿」への到達（あるいは回帰）という意味合いが込められる。それは、義経の「弓矢を取つて私なし」という言葉に明らかである。

そもそも、「弓取」において「名のり」とは合戦時に自らの氏名のみならず家柄・身分を大声で告ることであり、「名」には個々人を超えた、己れを己れたらしめる血脈への誇りがこめられる。

もちろん、すべての執着を捨てて仏に随順すべきという仏教の教えにあっては、血脈への誇りさえも妄執として退けられるべきものであるといえよう。しかし、

「よしそれ故に討たれんは、力なし義経が、運の極めと思ふべし、

と、名を惜しむための行為によって命が尽きることをも「運の極め」、いわば天命として受け入れる義経の覚悟には私欲の影はなく、だからこそ、

「さらずは敵に渡さじとて、波に引かるる弓取の、名は末代にあらずやと、語り給へば兼房、さてそのほかの人までも、皆感涙を流しけり。

と、名を惜しむ義経に兼房をはじめ周囲のすべての兵どもが感涙にむせんだのである。

先に、前シテの漁翁はひとり義経の、あるいは源氏の趨勢のみを語っているのではなく、平家の奮闘や悲哀をも同じ重さを以て語っていたことを述べた。後シテの義経もまた、「迷ひけるぞや、生死の、海山を離れやらで、」海・陸に対置していた源平双方を迷いの世界にとらわれたものとして語り出している。義経は「弓取」たるものの代表としてここに現れ、夢物語を語っている。義経の「名を惜しむ」ための行為が執心のなせるわざであるならば、すべての「名を惜しむ」弓取たちは生々流転する海をさまよい続けることになる。義経の語りを聞いた者たちが流した涙は、すべての弓取たちの運命へと濯がれる涙である。

「智者は惜しまず、勇者は恐れずの、弥猛心の梓弓、敵には取り伝へじと、惜しむは名のため、惜しまぬは一命なれば、身を捨ててこそ後記にも、佳名を留むべき、

このように、「身を捨ててこそ」後の記録に佳名が残る、と言表した義経の脳裏に、「身を捨てず」敵より逃れた生前の記憶が

蘇る。すなわち、『平家物語』巻第十一「能登殿最期」に描かれた、いわゆる「八艘飛び」伝説として知られる平教経との対峙である。

壇ノ浦の戦いで大将軍に組もうと義経を目掛け駆け回る教経に対し、義経は「判官かなはじとや思はれけん、長刀脇にかいはさみ、みかたの舟の二丈ばかりのいたりけるに、ゆらりととび乗」ったと伝えられる。この、鎧をつけたまま六メートルも離れた舟に飛び移る義経の軽業は、義経の際だった戦闘力を印象付けるものとして有名であるが、『平家物語』にも「されどもいかがしたりけむ」といぶかしがられるように、常に好戦的であった義経には珍しい敵前逃亡であった。

『八島』において、「惜しむは名のため、惜しまぬは一命」とみずからの信条を語った義経が、終曲において突如戦闘の場を八島から壇ノ浦に移したのは、「名を惜しむ」智者・勇者としての己れを貫く意味合いもあっただろうか。

今日の修羅の敵は誰そ、なに能登の守教経とや、あらものものしや手並は知りぬ、思ひぞ出づる壇の浦の、その舟戦今ははや、その舟戦今ははや、閻浮に帰る生死の、海山一同に震動して、

と、敵の教経とまともに組み合う様子を見せる。そして、大将の奮闘に続いて「生死の海山」を流転する兵たちも激しい戦いのさまを見せ、その戦いに呼応するかのように周囲の海山も激しく震動するのである。

こうした闘諍の姿は、己れの過ちを悔い仏にすがるような、一般的な「懺悔」のイメージとはほど遠いように感じられるかもしれない。しかし、世阿弥はむしろ、その者の持つ執心、妄執のすべてを「真如の月」のもとに明らかにすることが救いの道につながっていくと考えていたのではないだろうか。激しい修羅のありさまを示す兵たちの姿や声は、やがて周囲の自然と溶け合っていく。

第三章　海と空との一体化

「水や空」の歌が示すもの

終曲に描かれる合戦の場面は、「波・月・星」などの自然によって喩えられることで、いかにも夢物語にふさわしい、どこか現実離れした美しさをたたえている。「陸には波の楯、月に白むは、剣の光、潮に映るは、兜の星の影」とあるように、打ち寄

せる波のように立ち並ぶ楯や、月の輝きを反射する剣、星の如くきらめく兜の鋲は、夢から醒めればそのまま波となり月光となり星となって目に映ずるかと思われる。その予感を裏付けるかのように、夜が明けるにつれて敵の姿は鷗となり、鬨の声は浦風と化して、僧の夢は破れるのである。

夢の中で戦う人々を包み込むように、空と海の蒼さはその境を曖昧にしていく。「水や空、空行くもまた雲の波」は、『新後拾遺和歌集』（一三八四年成立）[10] 秋歌上の巻末に収められた

水や空空や水とも見え分かず通ひて澄める秋の夜の月

を引いているとされる[11]。ここでは、詞章に直接引用されていない下の句の部分、すなわち「通ひて澄める秋の夜の月」に注目すべきだろう。頭上の空と足下の水面、そのどちらにおいても澄み切った光をたたえている月によって、本来厳然たる区別があるはずの空と海が一体化していくというのである。作中、月が仏性をたたえた「真如の月」と歌われ、海が生々流転を繰り返す「生死の海」にたとえられていたことを踏まえると、終曲においてこの和歌を引用する意味は小さくないと思われる。

『新後拾遺和歌集』は足利義満の執奏を受けて後円融院の代に完成したもので、二条良基が序文を寄せている。同和歌集が完成した一三八四年には世阿弥は二十一歳で、良基から和歌・連歌の指導を受けていた時期であったから、同歌集の歌についても十分な関心を寄せていたであろう。生死の海をさまよいながら修羅の時を繰り返す義経に、真如の月の光を投げかけたいという願いが、世阿弥にはあったのではあるまいか。

以上の論からすれば、戦いにあけくれる義経たちのありようは、決してそのままで肯定されているわけではない。「生死の海に沈淪」する義経は、帰ることが許されない雲居（都）を想って嘆くのであり、旅僧には「瞋恚に引かるる妄執」を「おろかやな」と断じられてもいる。しかし、「惜しむは名のため、惜しまぬは一命」という信条のもと、私心なく戦いに身を投じる義経の一途さに、何らかの価値を認めていたからこそ、世阿弥は『八島』を書いたのだと思われる。義経をはじめとする兵たちが、あるべき名の十全な発露のために身命を賭し、その結果「佳名半ばなら」ざるという嘆きを抱えていたのであれば、この嘆きは、「より良く生きる」ということを目標とするすべての人にとって共通の嘆きであるはずだ。曲のはじめから終わりまで「生死の海」を照らし続けていた月は、理想に近づくために奮闘しつつ、「佳名いまだ半ばなら」ざるわれわれすべてに手向けられた希

望の光なのではなかろうか。

注

1　表章校注（一九七四）『日本思想大系　24　世阿弥　禅竹』岩波書店

2　奥田勲・表章・堀切実・復本一郎校注（二〇〇一）『新編日本古典文学全集　連歌論集　能楽論集　俳論集』小学館

3　本論文中の『八島』の本文および現代語訳は、『新編日本古典文学全集　謡曲集①』（小山弘志、佐藤健一郎校注、小学館、一九九七年）に拠っている。

4　星川清孝著（一九六七）『新釈漢文大系9　古文真宝（前集）上』明治書院

5　田中裕他校注（一九九二）『新日本古典文学大系11　新古今和歌集』岩波書店

6　大谷節子（二〇〇七）『世阿弥の中世』岩波書店

7　増谷文雄（一九七三）『現代語訳正法眼蔵　第三巻』角川書店

8　梅原猛・観世清和監修（二〇一三）『能を読む②　世阿弥　神と修羅と恋』角川学芸出版　などに指摘がある。

9　『平家物語』（市古貞次校注（一九九四）『新編日本古典文学全集46　平家物語②』小学館）においては、味方の兵士たちの静止も聴かず弓を拾って笑いながら帰ってきた義経が、「どんな高価な弓であろうと、命に代えられるものか」と「つまはじき」される。そして、その兵士たちの非難に対し、義経は弓が惜しいわけではなく、「尪弱たる（張りの弱い）弓」を敵方に拾われ、「『これこそ源氏の大将九郎義経が弓よ』と嘲哢せんずるが口惜しければ」命に代えて取ったのだと説明し、みながそれを聴いて「感じ」たのだと語りおさめる。

10　久保田淳監修（二〇一七）『和歌文学大系11　新後拾遺和歌集』明治書院

11　「水や空」の歌は、もとは『袋草子』（一一五六年頃成立）に収載されたものである。同書には、橘俊綱の歌会において、門番をしていた田舎の兵士がこの歌を詠み、他の参加者はその歌に「且つ感じ且つ恥ぢて」退出した、という逸話が紹介されている。同様の逸話は『十訓抄』『古今著聞集』にも引用され、同歌が『続詞花集』『雲葉集』にも採られていることから、当時にあっては人口に膾炙していた歌であったことが想像できる。